

「釧路湿原自然再生大会」開催 釧路湿原を未来の子供たちに

釧路湿原は、人為の影響を受け、自然の移り変わりをはるかに超える速さで湿原の消失や劣化が進んでいます。2001年に出された「釧路湿原の河川環境保全に関する提言」をふまえ、湿原の環境をラムサール条約登録当時（1980年）の状態に戻すため、国土交通省による湿原再生、蛇行復元など関係機関による自然再生の取り組みが始まっています。

1993年に開かれた釧路市でのラムサール条約締約国会議から10年目の節目を迎え、今後の自然再生の取り組みを確かなものにするを目的に、去る6月20日から22日にかけて、釧路市国際交流センターを拠点に「釧路湿原自然再生大会」が開催されました。

自然再生大会では、NGO等による49に及ぶ企画が催されるとともに、大会最終日には約500名が参加し釧路湿原自然再生シンポジウムが開催されました。シンポジウム開催に先立ち、辻井達一実行委員長、岡山和生国土交通省河川環境課長など多くの方々よりご挨拶をいただき、岡山課長からは、洪水、渇水といった非常時を対象とした河川管理とともに、川の365日を意識したうえで河川環境保全の重要性についてご指摘をいただきました。

シンポジウムでは、中村太士北海道大学大学院教授より「釧路湿原における自然再生事業の現状と課題」について基調講演をいただき、その後、毛利衛日本科学未来館館長など7名の方々によるパネルディスカッションが行われました。パネラーからは、自然再生の取り組みには、NGO、地域に暮らす方々の協力と理解、そして行動が重要との指摘をいただきました。

自然再生大会の締めくくりとして、伊東良孝釧路市長より、自然再生推進法に基づく自然再生協議会を設立し、地域のみならず世界の貴重な財産である釧路湿原を未来の子どもたちに引き継ぐための大会宣言が宣誓され、釧路湿原自然再生の確かな一歩が踏み出されるとともに、盛大に大会の幕が下されました。

（国土交通省 北海道開発局 河川計画課長 鈴木英一）



写真 パネルディスカッション

「関西支部小中高生対象見学会 明石海峡大橋塔頂体験会」開催される

土木学会関西支部主催の小中高生対象見学会「世界一高い明石海峡大橋の‘てっぺん’に登ろう！」が、7月26日（土）に開催された。参加者は応募総数1254名の中から抽選に当選した小中高生とその保護者142名で、朝9:30に橋の科学館前（神戸市垂水区）に集合した一行は3班に分かれ、橋の科学館、明石海峡大橋塔頂、北淡町震災記念公園の3か所を大型バスで移動しながら1日がかかりで見学した。当日は梅雨が明けた夏空で、絶好の見学会日和であった。

橋の科学館

明石海峡大橋をはじめとする本州四国連絡橋の建設に使われた橋梁架橋技術を紹介する施設。3Dシアターや実物模型などにより、「世界一の明石海峡大橋」には最先端技術が集約されていることを学習した。

明石海峡大橋塔頂

淡路島側のアンカレイジより管理用通路を約1km歩いて明石海峡大橋の3P主塔へ到着、エレベータで海面上約300mの「世界一高い明石海峡大橋の‘てっぺん’」に登った。子どもたちは恐々と下を見下ろして「車がおもちゃみたいに小さい」とはしゃいだり、「橋から見下ろす景色は最高」と記念撮影をしたり、初めて経験する海上300mの世界を満喫した様子であった。

北淡町震災記念公園

記念館は1995年1月17日の阪神・淡路大震災で現われた「国指定天然記念物 野島断層」を、当時のままに保存・展示した施設。断層に沿って大きくずれた地面や隆起した地面を実際に見学した。

見学会終了後に集めたアンケートによると、参加者の94%が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答。特に明石海峡大橋の塔頂見学では「普段では行けない所に行ったという得した気分に



写真 明石海峡大橋塔頂

なった」「土木の素晴らしさを実感した」「橋は車だけでなく電気や水も運ぶということがわかった」など多数の感想が寄せられた。また、『土木についてどう思いましたか?』という質問に対しては「快適な生活の土台に土木の存在があることが実感できて良かった」など、土木への理解と関心を示す意見が数多く出された。

(関西支部市民行事特定事業幹事、鹿島建設㈱ 芦田徹也)

第5回インターナショナルサマーシンポジウム 開催

7月26日(土)に土木学会本部において、第5回インターナショナルサマーシンポジウムが土木学会国際委員会(委員長:草柳俊二高知工科大学教授)の主催で開催された。このシンポジウムは土木学会の国際活動の一環として、英語での研究成果の発表の機会を設けることにより、日本に滞在中の留学生・エンジニアを中心に、国際交流と相互理解を深める目的で企画されたものである。1999年から開催され、5回目となる今回は128名の参加者(外国人学生・エンジニア83名、日本人学生・エンジニア19名、座長・特別講演者等関係者26名)を得て、7部門・91件の研究発表と基調講演、ならびに懇親会が行われた。

シンポジウム当日は、嘉門雅史京都大学教授(国際委員会アドバイザー)の開会の言葉に始まり、午前・午後合わせて計12の一般講演セッションと基調講演が行われた。基調講演では、角川浩二埼玉大学教授による“Optimal Strategies of Infrastructure Development in Developing Countries”と題した講演に、多くの参加者が熱心に聞き入っていた。一般講演での発表は、日本滞在中の留学生のものがその多くを占めたが、海外からの参加者の講演も複数件あったほか、日本人学生の発表も少なからずあり、参加者相互間の有意義な情報交換ができたとの声が聞かれた。

最後に参加者が一堂に会し懇親会が催され、の中で優秀発表講演者(受賞者は下記のとおり)に賞状と記念品が授与された。懇親会での参加者間の活発な交流によって、シンポジウムの主目的である国際交流と相互理解はさらに促進されたようであった。

優秀発表講演者 15名(敬称略)

Sopon Ritdumrongkul(東京大学) / Ali Alaghebandian(東京大学) / Kanako Usui(東京工業大学) / Danijel Kukaras(岡

山大学) / Mulyo Harris Pradono(京都大学) / Paola Mayorca(東京大学) / Govinda Raj Pandey(埼玉大学) / Muhammad Waheed Sarwar(東京大学) / Assela Pathirana(中央大学) / Mohammed Fazlul Karim(埼玉大学) / Aliakbar Golshani(埼玉大学) / Pa Pa Win(埼玉大学) / Chamroon Tangpaisakit(タイ・運輸省) / Riaz Ul-Islam(埼玉大学) / Xiaofeng Wu(国際航業㈱)

(国際委員会留学生分科会 第5回サマーシンポジウム組織委員会
委員長 松本泰尚(埼玉大学))

ものづくり大学の学生による歩道橋建設

開学3年目を迎え、いよいよ専門課程の授業が始まった。ご承知のとおり、ものづくり大学はユニークな教育システムを導入しており、4学期制、実技実習科目の重視、建築と土木とを統合した建設技能工芸学科にするなど多くの特色をもっている。

3年生の実習科目「築造実習」において、学内の2棟の建物(建設学科棟と製造学科棟)を2階で連絡する歩道橋を建設している。「(仮称)第一連絡橋」は橋長21.4m、幅員4.6m(有効幅員2.7m)、高さ4.4mの型コンクリートラーメン橋で、昨秋から4名の教員でプロジェクトチームをつくり、高度な技術力を要するところは建設技術者や専門技能者の助言を受けながら学生の手による本格的な橋梁の建設工事の計画書を作成した。並行して構造物の確認申請、基礎杭工事の外部発注などの準備作業を進め杭工事が3月末に竣工した。

4月からの授業は、学生による杭位置確認の測量作業が始まり、基礎部の鉄筋、型枠の組立、コンクリート打設、型枠解体の順序で進み、埋め戻してから橋脚柱の鉄筋および足場の組立までを行い第1学期を終了。第2学期からはコンクリート桁工事に進みハーフプレキャスト工法を採用して高所作業に移る。

授業は4科目が合同して成立しており、第1、2学期の1日を実習時間にあてている。教員が土木、建築出身の混合チームのため現場用語、測量などで混乱が生じ、この実習では土木で統一している。学生は今まで建築で指導を受けており、その差異を感じ取っていると思われ、これも教育効果と期待している。

担当教員のほかに4名の専門技術・技能者が指導につき、学生



写真 会場風景



写真 現場写真

の安全性にも十分配慮している。本年度は西側の半分、来年度に
残りを建設し、高欄製作は製造学科が担当することで両学科の相
互協力により、来年の11月の学園祭に開通式を予定している。

(ものづくり大学 増淵文男)

第5回「日本水大賞」表彰式・発表会 開催される

さる6月17日、第5回日本水大賞の表彰式、ならびに受賞者
の活動発表会が、秋篠宮同妃両殿下をお迎えして、北の丸公園内
の科学技術館において開催された(日本水大賞顕彰制度委員会主
催、委員長高橋裕)。式典のはじめに、秋篠宮殿下は、「多くの地
域における活動、研究によって水循環の健全化が一層推進される
ことを願っています。」と挨拶された。当日は、扇千景国土交通
大臣、鈴木俊一厚生労働大臣、渡辺具能環境政務官をはじめ、
受賞者、水関係省庁・後援団体の関係者、一般市民など多数の
方々が出席し、受賞者をお祝いするとともに、その長年にわたる
充実した活動の発表に耳を傾けた。

全国各地から集まった266件の応募活動の中から、次の諸団体
が表彰された。

日本水大賞・グランプリ：「熊谷市ムサシトミヨをまもる会
(連携団体 埼玉県熊谷市立久下小学校 エコクラブ)」の埼玉
県・稀少淡水魚『ムサシトミヨ』の保護と生息河川の環境保全活
動。国土交通大臣賞：「石川県・株式会社 御祓川」の民間
まちづくり会社とNPOによる御祓川再生事業。環境大臣賞：
「長野県・飯水教育会 自然調査研究委員会」の科学読み物集

「千曲川」の編集・発行。厚生労働大臣賞：「東京都・水みち
研究会」の水みちの調査研究活動。市民活動賞：「大阪府・
ニッポンバラタナゴ高安研究会」のニッポンバラタナゴの保護と
環境保全。青少年研究活動賞：「山口県立厚狭高等学校 生
物部」の「低酸素濃度に対するメダカとカダヤシの耐性につい
て」(受賞者は8月にストックホルムで開催される、ストックホル
ム・ジュニア・ウオーター・プライズの国際コンテストに参加
する)。

第6回(2004年)「日本水大賞」は、すでに7月7日「川の
日」より募集を開始しており、この賞が契機となって、全国各地
において水循環の健全化のための幅広い活動がさらに活発に展開
されることが期待される。(社)日本河川協会 紀陸富信)



写真 表彰

BOOK PICK UP

構造工学シリーズ12 橋梁の耐風設計 - 基準と最近の進歩 -



わが国では他国に例がないほど大型長大橋梁が数多く建設されてきており、旧タコマ橋のような事
故を起こさないために必須となる耐風設計技術が、国際的に見ても高い実績を挙げています。

本書では、わが国の橋梁の耐風設計基準と、そのベースとなる耐風設計技術を最新の知見を含めて
まとめ、わが国で実施されてきた制振対策の実例を網羅的に一覧の形で示しており、橋梁の耐風設計
に関わるすべての方に有益な内容となっています。

なお、本書の内容は、海外への情報発信を念頭においてまとめられたものであり、近い将来、ほぼ
同じ内容のものを英語で出版する予定です。

編集：構造工学委員会

橋梁耐風設計規準の国際化研究小委員会(委員長：藤野 陽三)

平成15年3月発行、A4判、218ページ、並製本

定価：2,415円(本体2,300円+税)

会員特価：2,180円 送料：470円

FAXまたはE-mailにて購入申込受付中

ホームページ「刊行物案内」
<http://www.jsce.or.jp/>

お申込み・お問合せ先

(社)土木学会・出版事業課
TEL 03-3355-3445 / FAX 042-946-0969
E-mail: pub@jsce.or.jp

丸善(株)・出版事業部
TEL 03-3272-0521 / FAX 03-3272-0693